

英語コーパス学会 Newsletter No. 81

Dec. 26, 2016

■会長: 投野 由紀夫
■事務局: 〒157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20 成城大学社会イノベーション学部 石井康毅研究室気付
■郵便振替口座: 00930-3-195373(英語コーパス学会)
■URL: <http://jaecs.com/> ■e-mail: jaecs.hq@gmail.com ■twitter: @JAECs2012

JAECs
Japan Association for English Corpus Studies

<今井光規先生叙勲のお知らせ>

平成 28 年秋の叙勲において英語コーパス学会の第二代会長の今井光規先生（元摂南大学学長）が瑞宝中綬章の受章の栄に浴されましたことをお知らせいたします。

第 42 回大会報告

■概要

英語コーパス学会第 42 回大会は、2016 年 10 月 1 日（土）と 2 日（日）の 2 日間にわたり成城大学 7 号館にて開催されました。第 42 回大会では、Laurence Anthony 先生（早稲田大学）の講演、西村祐一先生（元名古屋大学大学院生）によるワークショップ、後藤一章先生（摂南大学）の司会進行によるシンポジウム、さらに 17 件の研究発表が行われるなど、投野由紀夫新会長（東京外国語大学）のもとで初めて開催される大会としてとても充実した内容となりました。

まず、大会初日の午前中には、西村祐一先生によるワークショップ「British National Corpus の利用にかかわる諸問題」が開かれ、BNC を利用する際の注意点が解説されました。

1 日目の大会は、まず投野由紀夫会長による開会の挨拶に続き、開催校成城大学学長の戸部順一先生に挨拶のお言葉をいただきました。次に、磯野達也先生（成城大学）の司会のもと総会が行われました。総会では、会計の小島ますみ先生（岐阜市立女子短期大学）より 2015 年度会計報告及び 2016 年度予算案が示され、いずれも承認されました。

総会に続き、学会賞授賞式が行われました。最初に学会賞選考委員長の 新井洋一先生（中央大学）から学会賞および奨励賞について審査報告がありました。選考理由が説明された後、水本篤先生（関西大学）が 2016 年度英語コーパス学会奨励賞の受賞者に決定したことが発表されました。授賞式では投野会長から水本先生に賞状、副賞が贈

呈されたのに続き、水本先生より受賞の喜びを語るスピーチが行われました。

2016 年度英語コーパス学会賞
受賞者：該当なし

2016 年度英語コーパス学会奨励賞
受賞者：水本篤氏（関西大学）
受賞対象：「英語学術論文執筆支援ツール（AWSuM）」の開発と公開

第 1 日の研究発表は 2 室でのパラレルセッションとなりました。第 1 室 宇佐美裕子先生（東海大学）と第 2 室 鎌倉義士先生（愛知大学）の司会のもと、計 6 件の研究発表が行われました。

その後、後藤一章先生（摂南大学）の司会進行でシンポジウム《コーパスアノテーション（タグ付け）の功績と課題》が行われました。和泉絵美先生（同志社大学）、後藤一章先生、椎名美智先生（法政大学）、田畑智司先生（大阪大学）の 4 名による議論はコーパス分析におけるアノテーションの有効性と限界を明らかにしました。発表後にはフロアを交えた議論で大変熱の入ったシンポジウムとなりました。

2 日目の午前は 9 時半から 2 室でのパラレルセッションとなりました。第 1 室 山下美朋先生（立命館大学）と第 2 室 冬野美晴先生（九州大学）の司会のもと、計 7 件の研究発表が行われました。続いて、午後 2 室でのパラレルセッションとなり、第 1 室 西尾美由紀先生（近畿大学）と第 2 室 加野まきみ（京都産業大学）の司会のもと、計 4 件の発表が行われました。

14 時からは Laurence Anthony 先生の講演「New directions in corpus linguistics: Utilizing the rich annotations found in social media data」が行われ、先生の熱い講演に聴衆は引き込まれていました。

第 42 回大会は 2 日間を通して、135 名の参加者がありました。多くの皆様にご来場いただき、質量共に充実した学会を開くことができました。

■ 研究発表セッションの概要

第1日第1セッション

[司会・報告] 宇佐美裕子 (東海大学)

「コンピュータ環境のない英語教室における DDL のための教材開発：ハンズオン DDL と紙ベース DDL の指導実践に基づいて」

若松弘子 (筑波大学大学院生)

中條清美 (日本大学)

データ駆動型学習 (data-driven learning : DDL) はことばの意味や文法規則をコーパスから「発見」する学習手法であり、アクティブ・ラーニングの一形態としても注目されている。本発表では、学習者が自分でコーパスを検索するハンズオン DDL の授業実践と、コンピュータのない通常教室で DDL を実践するためのプリント教材開発およびそれを用いた授業実践について報告した。それらをふまえて、効果的な DDL の条件についても指摘した。

ハンズオンおよび紙ベース DDL の実践は、Web で無償公開されている SCoRE (<http://www.score-corpus.org/>)を用いて、大学一般初級英語クラスの文法指導について行われた。教師らの授業の振り返りと、質問紙と自由筆記で収集した学習者の感想から、まず、ハンズオン DDL の場合、SCoRE が操作しやすく、集中して発見学習ができた等の学習者の意見や、文法規則の発見に至るまでの仮説形成・検証に適した「考えさせる」タスクを、検索結果を見越して作成するのに労力を要したという教師の意見が挙げられた。一方、プリント教材を用いた紙ベース DDL の場合、学習者からは、ハンズオン DDL の「わくわく感」には欠けるが、同じパターンの英文が多くてルールを見つけやすく、納得できる等の意見が挙げられた。教師側からは、学習者に提示したい英文を取捨選択し、レベルに合わせた編集ができ、作成したプリント教材は他の教師も使用できるなど利便性も高いこと、また、ハンズオンと同様、「考えさせる」タスク作成が重要であることが指摘された。学習者はハンズオンと紙ベースの両方の DDL を好意的に評価していた。これらのことから、適切なレベルのコーパスを使用し、分かりやすく英文を提示し、かつ、学習者側に考えさせる問いを与えることができれば、初級レベルの学習者でも、ハンズオンおよび紙ベースの両方において、効果的な DDL の実践が可能であることが示唆された。使用した DDL 用教材は、SCoRE サイトの「DDL 教材バンク」からダウンロードできる。なお、質疑応答では、SCoRE からダウンロードした英文は自由に改変が可能であること等が説明された。

「教育用例文を携帯端末で利用する WebSCoRE の開発とそのユーザビリティ」

濱田彰 (日本大学)・

Laurence ANTHONY (早稲田大学)・

中條清美 (日本大学)

本発表では、英語教育用例文コーパスを携帯端末で利用できる WebSCoRE の開発過程、および、そのユーザビリティと教育効果を報告した。WebSCoRE はデータ駆動型学習用のプラットフォームであり、複数の用例を観察させることで、学習者が自らことばの意味や文法規則を発見するアクティブ・ラーニング型の指導に利用できる。

これまで、データ駆動型学習を授業に取り入れるには、適切なレベルのコーパスと使いやすいツールという課題に加えて、コンピュータ環境の不備という教育環境の問題があった。そこで本研究は、英語初級者向けに開発された教育用例文コーパス SCoRE を、Web 並列コーパス検索エンジン AntWebConc-Parallel に搭載し、WebSCoRE として無償公開した。同時に、日英並列コーパスの構築に向けて日本語コーパスの分かち書きを可能にする SegmentAnt も公開した。WebSCoRE は特に、古いパソコン教室や Wi-Fi が強力でない教室に対応するシンプルなツールであり、携帯端末上で容易に動作するよう設計された。日本人大学生を対象に WebSCoRE のユーザビリティを調査した結果、スマホの基本的な操作ができる大学生にとって、WebSCoRE は英語学習のための有用なツールになり得ることが示された。質疑応答では WebSCoRE のソースコーパスや各種機能についての質問があった。WebSCoRE に搭載されている教育用例文コーパスは COCA 等に基づき英語母語話者が作例した 10,113 文で構成されている。各例文は語数や単語の難しさ、構文の複雑さに基づき初級・中級・上級レベルに分類されている。WebSCoRE ではこれらの例文をコンコーダンスに表示させることができ、検索結果をコピーして教材化することもできる。現在、教育用例文コーパスの拡充を目指して国内外から様々な英文の投稿を受け付けており、データ駆動型学習を普及させる一助となることが期待される。

「CEFR レベルに基づいた英単語の変換：英文難易度の最適化を目指して」

内田 諭 (九州大学)

高田祥平 (大阪大学大学院生)

水嶋海都 (大阪大学大学院生)

荒瀬由紀 (大阪大学)

本研究の目的は、学習者に提示する英文の難易度を最適化するための手法を提案し、レベル自動調整システムの基礎の構築を目指すことである。特に学習者にとって理解の難しい単語（難単語）に焦点を当て、文脈に沿った最適な類義語を提示することを目標とする。語彙レベルの判定には、世界的な言語能力の評価指標である Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) に準拠する。これにより、様々なバックグラウンドを持つ学習者に対して標準化した難易度を提示できる。

本発表では、目的レベルに合致した英単語の選定作業を支援するためのシステムの構築を目標に、共起スコアをベースにした客観的な単語の変換手法を提案し、その結果に対するネイティブの判定を報告した。

(1) 難単語の選定には、「CEFR-J Wordlist Version 1」(2013: 東京外国語大学投野由紀夫研究室)を用い、English Vocabulary Profile を参照して C1 および C2 レベルの単語のリストを拡充し、B2 レベル以上のものを主なターゲットとした。例えば、And e-readers fail to re-create certain tactile experiences of reading on paper という入力に対しては、B2 レベルである tactile がターゲットとなる。

(2) 次に電子データで利用可能な類語辞書 (Roget's 21st Century Thesaurus, Third Edition) からターゲットの類義語を抽出し (palpable, tactual, material, physical, solid, tangible), CEFR レベルによる絞り込みを行った (B1 以下のものは material (A2), physical (A2))。

(3) 最も置き換え可能性が高いものを選定するため、ターゲット (tactile) の文脈に最適と考えられるものを共起スコアから算定する。ここではターゲットと文法的・意味的に関連性の高い experience を head として抽出し、material + experience (該当なし), physical + experience (2.64) の共起強度を COCA の MI スコアをベースに計算した。

これらのプロセスを経て、前述の例では tactile は physical に置き換え可能と判定された。この手法による変換の妥当性を検証するため、大学英語テキスト (Authentic Reader: A gateway to Academic English. 研究社, 2016) からランダムにレッスンを選択し、120 件についてネイティブスピーカーによる可否の判定を行った。その結果、65 件 (約 54%) が可と判定された。不可と判定されたもののうち、専門用語と考えられるもの (変換前の MI が高く事前にある程度回避可能)、前後の文脈に同じ単語が使用されるもの (機械的に回避可能) などのパターンが見られ、これらの処理を施すことで正答率を高められる可能性が示唆された。今後

の課題として、head の特定の精度化、共起スコアの拡充、他モデルとの比較などが挙げられる。

第1日第2セッション

[司会・報告] 鎌倉義士 (愛知大学)

「コーパスを活用した get 受動態の考察」

奥西嘉一 (神戸学院大学非常勤)

本発表では、get 受動態に関して、以下のような 2 つのリサーチクエスチョンを設定し、BNC を使って調査・研究を行った。第一に、get 受動態は、純粋に中立的な状況を表す受動態より、むしろ主語がさしているもの、もしくはそれと関係している誰かに対して利害関係を表現する受動態において独占的に生起してくる (Huddleston & Pullum, 2002) とされているが、実際のところ本当にそうであるのか。まず BNC の Spoken Texts からランダムオーダーで get 受動態の文を 250 取り出し、それらの文の中の動詞の頻度を調べ、3 以上の動詞をリストアップした。そしてそれらの動詞について 100 万語当たりの hit 数が多く、かつ利害関係が良く分かる動詞を一つ選び、その動詞を含む全ての文をランダムオーダーで取り出し (362 文)、その中の最初の 100 文について調べた。第二に、get 受動態は、よりインフォーマルなコンテキストの中で使われ、文語英語より口語英語においてより一般的である (Huddleston & Pullum, 2002) と言われているが、現代英語において get 受動態は本当に文語英語より口語英語において使用頻度が高いのか、高いとすればどれほど高いのか。BNC の Spoken Texts と Written Texts のそれぞれにおける get 受動態の全語数の中での hit 数と 100 万語当たりの hit 数を調べ比較した。

上記 2 つのリサーチクエスチョンを解決するために、使用する BNC における get 受動態の検索式を {get/V} _VVN とした。1~2 のリサーチクエスチョンの結果を以下に記す。第一に、get 受動態は「主語がさしているもの、もしくはそれと関係している誰かに対し利害関係を表現する受動態において独占的に生起してくる。」のではなく、むしろ「純粋に中立的な状況を表す受動態」においてよく使われる。第二に、get 受動態は hit 数では口語英語より文語英語の方が多 (約 2 倍) が、100 万語当たりの hit 数 (頻度) は文語英語より口語英語の方がはるかに多 (約 2.5 倍)。

発表後の質疑応答では、分析対象のコーパスとして BNCweb が使用したことを確認され、更なる分析を可能とする検索文が助言された。そして、コーパスのタグ付けの正確性に対する疑問より get の活用形文字から検索を勧められた。辞書によっ

ては *married* が過去分詞ではなく形容詞として分類されている。タグによる検索だけでなく、語の表示形による検索や分析を考慮すべきである。

「補文標識 *for* が不定詞補文の前に出現する場合の意味的特徴」

西原俊明 (長崎大学)

本発表では、Levin (1993)の分類に基づき、Verbs of Communication を Manner of Speaking Verbs, Verbs of Gestures / Signs Involving Body Parts, Wink Verbs, Verbs of Instrument of Communication に下位分類して、補文標識 *for* が不定詞補文の前に出現する場合の意味的特徴について考察した。Verbs of Gestures / Signs Involving Body Parts では、(1)(2)に示すように、NP が動詞に直接後続する場合と補文標識 *for* を伴う不定詞補文が後続する形式が可能である。

(1) Don gestured him to wait. (COCA)

(2) She gestured for him to lean down. (COCA)

(1)の文法形式をとる場合、動詞に後続する NP は直接的なメッセージの受け手を表すが、*for*-句は直接的なメッセージの受け手、あるいは間接的なメッセージの受け手のいずれかを表す。*for*-句が間接的なメッセージの受け手になるうる根拠として、補文に受動化の適用が可能であることが挙げられる。

(3) a. Luellen sat down and motioned for him to be seated. (COCA)

b. Their dad Laurie, who also celebrated the goal, said two women Aston Villa supporters “screamed” for the family to be booted out. (Birmingham Mail-2014/12/23)

(1)-(3)の言語事実をあわせて考えると、間接的なメッセージの受け手の場合には必ず *for*-句を伴う必要があることになる。この事実は、他のコミュニケーション動詞にも見られる。間接的なメッセージの受け手になるというのは、別の人物が介在し、主語とその人物はお互いに確認しあえる状況下にいるが、主語と *for*-句が表す人物は確認できない状況にいて、介在する人物がメッセージを *for*-句が表す人物に与えるという状況を指している。

発表後の質疑応答では、直接的な意味において *for* の有無による意味の違いがあるかを質問された。確認したところ、英語母語話者でも応えられる NP が直接後続する語では NP を選択するという回答が多かったが、前置詞を伴う動詞はその使用が異なるようである。この点は今後の研究課題として進めていく。

「共起語に見る *luxury* に込められた期待：WWW テキスト例に」

近藤雪絵 (立命館大学)

luxury は 18 世紀より広く求められるものになり、*luxury* を求めることは資本主義・経済発展に貢献した一因である一方で、近年では *luxury* という言葉が持つファッションナブルな響き故に、その言葉が乱用される傾向にある。そこで、本発表ではある語が乱用されるのは、その語が効果的に我々の期待に働きかけるという想定の下、*luxury* が持つ性質を、その修飾する名詞と等位接続詞により並列共起する名詞から探求し、我々が *luxury* を何に見出し、何を得ようと期待するのかを明らかにしようとした。分析対象は近年の WWW テキストとし、大規模ウェブクロールコーパスである enTenTen 及び ukWaC が用いられた。分析には Sketch Engine が用いられた。分析 1 として *luxury* が修飾する名詞を、分析 2 として *luxury* と並列共起する語を抽出し、クラスターが作成された。

luxury が修飾する名詞には主として「休暇」に用いられるものが抽出された。また *luxury* が「日常」に用いられるものを修飾する際、加えて特別性を示す語を伴うことが分かった。これにより、我々は *luxury* を、1. 日常から切り離された環境（休暇等）の中に或いは 2. 日用品に特別性（性能、ブランド、材質）を加えることで見出していることが示唆された。2.の日用品をさらに詳しく見るため *luxury item(s)/product(s) such as X* を検索したところ、このフレーズの中で *luxury* と高頻度で共起語する一方で、特別性を示す語を伴わない名詞として *perfume, jewelry* が抽出された。上述の名詞の性質から、我々は自身とそのものを一体化することで *luxury* を得ようとすることが示唆された。

次に、*luxury* と並列共起する語の類義語から *comfort, elegance, style, opulence* のクラスターが作成された。並列に共起する場合、使用する接続詞や語順によって意味が変わる可能性は否めないものの、大きくみてこれらの語は *luxury* なもの・施設・サービスが併せ持つと期待される性質を意味し、その性質と自身を一体化しようとする可能性が示唆された。

発表後の質疑応答では、分析対象となった *chocolate* の文脈を明確にすることと *representativeness* の問題としてホームページを中心に行う分析が現代の言語運用の全てを示しているのか、広告文の分析ではないかとの二点が指摘された。

第2日第3セッション

[司会・報告] 山下美朋 (立命館大学)

「日本と米国の医学論文における論理展開の構成要素にみられる言語的特徴—コーパスを利用した国際コミュニケーションのための学術英文の検討」

浅野元子 (大阪大学大学院生)

本発表では、日本と米国の同一専門分野の英文医学誌の論文テキストを計量し、専門英語教育の観点から考察のムーブを分析して、知見を各国の読み手に伝える英語における特徴について報告が行われた。日本の循環器学誌 *Circulation Journal* (CircJ) と世界的に著名な米国の循環器学誌 *Circulation* (Circ) の研究論文各 10 報を対象とした。

国際英語は、国際コミュニケーションで使用される英語と定義され (Smith, 1976), 英語使用者間での相互理解が可能な統一性と多様性を有する英語変種から成ることが想定されている (日野, 2008)。研究論文は、Discipline-specific な英語の変種とされ (Clancy, 2010), 米国の Circ は、科学の中でも循環器学分野の文化による多様性を有する国際英語の例と考えられ、日本の CircJ と比較することは教育的意義があると考えられた。

日米の論文全体では、クラスター分析 (小林, 2011) により差異が示唆された。日本の論文での高頻度語は、Mann-Whitney の U 検定 (田畑, 2016) で検討すると "the present study" など日本の教科書にみられる表現が散見された。

考察部分は、発表者と医学専門家がムーブを分析すると論理の流れにパターンが推察され、ムーブの下位要素であるステップでの言語的特徴が示唆された。結果の叙述に "find" などの動詞、結果の解釈や限界の叙述に "might" などの法助動詞が高頻度に認められた。

論文全体では日米のテキストで、考察の構成要素ではステップで、各々差異が示唆された。

フロアからは一部の法助動詞について、ヘッジ表現を含むというコメント、ならびにクラスター分析での設定、考察を検討した理由、教育現場での説明、医学専門家との共同作業の継続についての質問が出され、R による hclust の使用、書き手の意図が反映され書くのが難しいとされる考察が選択されたこと、読み手が誰かにより教育での取り扱いが異なること、共同作業を継続することなどが説明された。

「ムーブ分析と定型表現の記述を融合する方法論の提案—英語医学論文の導入部を例に—」

石井達也 (広島大学大学院生)

今発表では、初めにジャンル分析においてムーブという分析単位を基に研究が進められ、一方コーパス言語学では、単語の振舞いを記述する際に、定型表現という分析単位が用いられてきたことを確認した。そして特定の分野のジャンルの論文をムーブごとにコーパスデータを集積することで、ムーブごとに特有の定型表現を抽出できるのではないかと提案した。そこで、実際に Nwogu (1997) が提唱する医学論文のムーブの流れに基づき、2013 年及び 2014 年に発行された Impact Factor の高い 4 つの国際雑誌から、Academic Level の高かった医学論文 395 部の導入部を、3 つのムーブに分割し、コーパスデータを構築した。3 つのムーブとはそれぞれ、背景知識の導入(ムーブ 1)、先行研究とその問題点の指摘 (ムーブ 2)、研究の目的とその主たる研究手法の提示(ムーブ 3)であった。分析する際は、395 論文を全体コーパスとして、それぞれの Keyword を算出した。その後 Wordsmith5 を用いて、ランダムに抽出された 100 のコンコーダンスラインをコーパス駆動型的手法で分析した。その結果として、各ムーブに関連する定型表現を計 18 個示した。

質疑では、まず初めにムーブを正確に分割できるかという質問が寄せられた。ムーブの分割は主観に基づくものであったため、完璧な分割は不可能であると認識しているが、395 論文という量で補い、質の担保を図ったと返答した。次に、他のムーブでは何が Keyword であったか、またその理由は何かという質問があり、結論の箇所ではこれから何をすべきかについて言及するムーブでは、should が Keyword であったことを報告した。理由については今後の課題である。そして最後にムーブ 1 で出てきた名詞 cause の振舞いが semantic prosody としては negative と言えるのではないかと提案を受けた。この点については、semantic prosody から定型表現を捉え直すことを課題として、更なる定型表現の可能性を示していきたい。

「学術論文のイントロダクションにおけるブースターの検証」

中谷安男 (法政大学)

先行研究では、学術論文のイントロダクションにおいて、書き手の主張や断定を強めるブースター (Booster) が、いかなる目的で具体的に使われるのか十分議論されているとは言えない。本研究では、自然科学、社会科学の経済・経営、人文科学の応用言語学から、それぞれインパクトファクターの高い代表的な学術誌を選び 200 本の論文による総語数約 105 万 2 千語の学術論文コーパス

(Representative Academic Paper Corpus: RAPC)を作成した。この RAPC 中の Introduction として明記している章、または明記されていない場合は、それと同等の最初の章の総計 19 万 9 千 6 語を抜き出した。このイントロダクションのコーパスを、RAPC コーパスの他の部分 85 万 3 千語を参照コーパスとして、Wordsmith 6.0 を活用し特徴語を抽出し、クラスター表現を確認した。さらに Hyland (2005) のブースターのリストを活用し、イントロダクションにおけるこれらの表現の頻度と、参照コーパスにおける頻度と比較した。分析の結果、イントロダクションでは特定のブースターのクラスター表現が頻繁に使われていた。これらを Allison (1995), Hyland (2000, 2005) 等の先行研究に基づき手動で分類すると、以下のような 5 つのグループの表現に集約することが可能となった。①範囲の広さ：広く認められている研究領域という主張、例 *It is widely believed that...*, ②数の多さ：研究の数が多い重要な課題、例 *A number of studies have been conducted*, ③期間の長さ：長い間取り組まれている研究、例 *research has long been recognized that*, ④新規性：最新の研究領域だと重要性を強調、例 *Recent research trends towards*, ⑤ポジティブさ：ポジティブな表現で内容を肯定 例 *There is compelling evidence that* である。これらの示唆をいかに学習者の指導に活用するかが今後の課題として提示された。質疑応答では、人文系と科学系の論文では違いがあるかとの質問に対し、分野による違いがあることを示し、また *no, not, little, few* など否定的な意味を持つ語彙を伴う *booster* に関しては今後の研究で明らかにすることが確認された。

第2日第4セッション

[司会・報告] 冬野美晴 (九州大学)

「前置詞句の表現分布—モノの存在形状からみた in, on, at の使用実態—」

佐野洋 (東京外国語大学)

Laurence Newbery-Payton (東京外国語大学大学院生)

本発表では、BNC を用いて、前置詞句内の名詞句表現の分布を調査した結果を報告した。

名詞 (英語) がモノの存在を意味を選好して示すと仮定し、そして、モノの形状の次元に対応する前置詞として、*at, on, in* を取りあげた。モノの概念導入の表現として、近似的に、「名詞 (複数形態)」、「不定冠詞+名詞」と「不定冠詞+形容

詞+名詞」のパターンを用いて BNC (およそ 4200 万語) から用例を検索した。参考として、モノの役割・機能の意味の表し方を、「無冠詞名詞 (単数形)」のパターンで近似して、同様に検索を行った。

「不定冠詞+形容詞+名詞」パターンにおける形容詞の種類についての仮説は、有界の (形が明確に見える) 存在名詞の場合は、形容詞によって属性限定がなされ、非有界の名詞や想像の名詞の場合には、形容詞によって性質限定がなされる、というものである。

前置詞句の総計からみると、*at* 前置詞句の総計 << *on* 前置詞句の総計 << *in* 前置詞句の総計であった。総数には違いがあるが、パターン毎の分布の有り様 (比率) は似ており、今後検定作業を含めて検証する予定である。各前置詞句については高頻度の名詞一覧を示すに止まり、当該名詞の質的な分析については、モノの性質限定のための形容詞の分布と合わせて今後の課題である。最終的成果は学習教材の開発に応用する予定である。

質問では、定冠詞付の前置詞句を調査しない理由が問われた。定冠詞は、モノの概念参照の道具であり、本発表では概念導入の表現に焦点を当てた旨を回答した。日本語と英語の時空間解釈について質問があった。日本語では形態的に「ている」がシステムの接続することから始動相の意味であること、英語は語彙ごとにアスペクト表現がきまることを回答した。さらに、例えば“*in order*”と“*in order to*”は意味が違う。こうした違いを区別するべきではとの質問があり、今後再検索では考慮する旨を回答した。

「上級英語学習者コーパスにみられる in/on/at/of の誤用と日本語の“無界性”」

望月圭子 (東京外国語大学)

Laurence Newbery-Payton (東京外国語大学大学院生)

本発表では、TOEIC 平均 800 点程度の東京外国語大学上級英語学習者コーパス (2011-2013 年度英語専攻 1 年生 120 名アカデミックライティング授業時作文 1,189 作文、誤用タグ付き)

<http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus/>

<http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/>

における、“*in, of, on, at*”の誤用・非用の計量的分析と、母語の影響について考察した。

まず、計量的には、空間認知に関わる“*in*”の過剰使用率、“*on/at*”の非用率、また、“*of*”の過剰使用率が高いことが観察された。

なぜ“*in*”の過剰使用」が日本語母語学習者に顕著なのだろうか。場所を表す“*in/on/at*”は、日

本語では「に」と「で」に相当するが、その使い分けは、空間認知とは無関係に、統語的に決定されるため、前置詞の空間認知による区別は、上級学習者においても学習困難点となることが推測される。

次に、「of」の過剰使用については、日本語母語話者は、中国語母語話者（国立台湾師範大学・上海外国語大学英語科提供の学習者コーパス）と比較しても、“of”の過剰使用が卓越している。これは、日本語の「NP1のNP2」という連体修飾表現だけで、多様な意味関係を表すのに対して、対応する英語では、空間認知に基づく前置詞が必要という相違が要因と推測される。

例えば、ANAの飛行機の機体に描かれるタグライン“*Inspiration of JAPAN*”は、英語母語話者には不自然に感じられる。なぜなら、*inspiration*は、「あるインスピレーションが、ある起点から、ある着点に移動する」という移動事象をイメージするため、“*Inspiration from JAPAN*”のほうが「日本から世界に日本の優れた品質・サービスを発信する」というブランドイメージにふさわしいからである。

結論として、前置詞習得の困難さは、日本語の格助詞「に」「で」「の」が空間認知とは無関係であることに起因し、さらには、日本語における空間認知の非卓越性、即ち“無界性”によるという可能性を提示した。

質疑応答では「誤用」及び「非用」という用語の定義、中国語/日本語母語話者の前置詞誤用の相違についての質問を頂いた。後者の質問には、中国語は、日本語よりも空間認知表現が多いこと、中国語母語話者では、“of”の過剰使用が日本語母語話者ほど観察されないこと、東外大日本語母語話者中国語学習者コーパスにおいても、中国語の空間認知表現の欠如が卓越していることをご紹介した。本発表の詳細は、以下もご参照ください。

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/86849>

「アメリカ大統領選挙候補者の特徴」

杉山真央（大阪大学大学院）
木山直毅（和歌山大学非常勤）

本発表では2016年度大統領選挙において、最後まで候補として残っていたドナルド・トランプ氏、ヒラリー・クリントン氏、バーニー・サンダース氏の選挙演説を量的、質的な観点から各氏の政策アピール、共和党と民主党でみられる差を論じた。

まず、量的な議論においては、各氏の政策アピールに関して論じた。そこではサンダース氏とクリントン氏は各氏が掲げる政策の中心的な語彙

が多く見られる一方、トランプ氏は、縮約形が目立つことが報告された。本発表では、氏のスタイルは高等教育を受けていない支持層にあわせた“*Covert speech*” (Holmes, 2001)の体現であることを提案した。

次に、質的な観点からは、*future*の使用を手がかりに、各候補者の焦点の差を論じた。ここからヒラリー氏とサンダース氏は*future, can, need to*という未来に関わる表現を多用する一方、トランプ氏は*can't*の使用や現政権を批判するような表現を多く使用していることが確認された。この観察から、与党の候補者は現政権を引き継ぐことから未来に焦点を当てた表現を多く使用し、野党の候補者は現政権を批判する必要があるため現在に焦点をあてていることを論じた。

質疑応答では、*can*は未来に焦点をあてるが、*can't*がなぜ現在に焦点を当てるのか、また時系列的に語彙の使用に変化はみられるかなどの質問があり、今後の研究課題が明らかとなった。

「TED Talkにおける使用語彙分析の試み」

杉森直樹（立命館大学）

本研究発表は、活動家や思想家、アーティスト、研究者等がスピーチを行うイベントであるTED (Technology, Entertainment, Design)の使用語彙分析のパイロット研究を報告したものである。本研究では、代表的なTED Talkとして*Official TED Talk Guide Playlist*等で選定されている56本のtranscriptをTEDの公式サイトから収集し、総語数約160,000語のミニコーパスを作成した。Coxhead and Wells (2012)及びWang (2012)の先行研究にならってGeneral Service List (GSL)とAcademic Word List (AWL)を用いた語彙頻度プロファイルの分析を行った結果、本研究でもAWLのレベルに含まれる語彙の使用割合が低い傾向が示され、その分野の専門家が一般聴衆に自分の主張を分かりやすく説明するために平易な語彙を使用する*science popularization*の手法が用いられていることを示唆するものとなった。また、TED Talkの特徴語の分析については、BNCのSpoken Component (Context-governed Part)の中から51のテキストとMichigan Corpus of Academic Spoken English (MICASE)の18本の講義のデータをそれぞれ参照コーパスとし、対数尤度比による特徴語の分析を行った。その結果、*I*や*we*といった一人称代名詞の使用が有意に多く、スピーカーは聴衆との心理的な接近をはかるために*storytelling*の手法を用いる傾向があることが示された。

質疑応答では*science popularization*の手法、TED Talkにおける非言語情報と使用語彙との関係、語

彙頻度プロファイルにおける語のカウント方法に関する質問等が出された。今後、より大規模にデータを収集して更に研究を進める予定である。

第2日第5セッション

[司会・報告] 西尾美由紀 (近畿大学)

「Agatha Christie 作品の計量文体分析」
土村成美 (大阪大学大学院)

本発表では、計量文体分析の手法を用いて Dorothy Sayers, Conan Doyle と比較し、Agatha Christie の文体的特徴が報告された。ランダムフォレストを用い、各作家から無作為に 50 作品を抽出し、分析を行い、以下のような文体的特徴が示された。(1) Agatha Christie には someone, anyone などの -one 形の代名詞が多く、一方 Sayers では somebody, anybody の -body 形が多用されている。(2) Agatha Christie の作品では don't, doesn't など動詞の短縮形が多いのに対し、Doyle はこうした短縮形をほとんど用いていない。(3) Agatha Christie は女性代名詞(she, her)を多く用いる傾向がある。

代名詞の使用については、登場人物によって使い方に差が見られるのかどうかについてはまだ明らかにされておらず、分析の必要性について言及があった。短縮形の使用については、narrative と speech を区別し、使用の差異を調査する必要もあり、さらなる検証が望まれる。女性代名詞の使用については、Sayers, Doyle の作品の主人公が男性探偵のみであるのに対し、Christie 作品では女性探偵 Miss Marple がいるためではないかとの指摘があり、発表者も今後の課題としている。

さらに、動作に関する動詞について、Agatha Christie は動詞 nodded と共に -ly 副詞を用いたり、*paused and then* を多用して登場人物の行動を表したりすることで、読者の小説の状況描写をより容易にしているのではないかと提案もなされた。

質疑応答では、ランダムフォレストの結果のプロットについての指摘のほか、Agatha Christie が幼少期に読んでいた Doyle の影響を受けた文体的特徴には具体的にどんな特徴があるのかなどの質問があった。計量文体分析の手法と精緻な読みを合わせた今後の研究に期待したい。

「Alice Bradley Sheldon 作品群の通時的著者内変化と作品の年代推定」

木村美紀 (明治大学大学院)

本発表では、Alice Bradley Sheldon (191-1987: 米国) という 10 年近く正体不明・性別不明の作家として著作活動を行ってきた作家作品群に対し、計

量文体論の手法を用いて通時的な文体変化の検出を試み、その結果が報告された。

Alice Bradley Sheldon コーパスの作品群の中には、出版年が明らかになっているが執筆年が不明な 2 作品 (*In the Great Central Library of Deneb University* と *We Who Stole The Dream*)、出版年・執筆年ともに不明な 1 作品 (*Go from me, I am one of Those Who Fall*) が含まれている。これら 3 作品に関して、高頻度語彙を指標にし、教師なしの分類手法であるマルチスケールブートストラップ法を用いたクラスター分析と主成分分析、教師ありの分類手法であるランダムフォレストとサポートベクターマシン (SVM)、判別分析という 5 種類の統計手法を用いながら執筆年代の推定を探索的に試みている。

これら 5 種類の統計手法を用いた結果、マルチスケールブートストラップ法を用いたクラスター分析や、教師ありの分類手法であるランダムフォレスト、SVM、判別分析において執筆年代不明の作品群の年代推定が行えるようになり、特に、*We Who Stole The Dream* に関しては Approximately unbiased *p*-value などから 1970 年代前半に書かれた作品として推定することが可能になったと報告された。質疑応答では、特に統計手法に関する事象に関して、サンプルサイズの数が少ないと過学習がなされているのではないかと、との指摘があった。

第2日第6セッション

[司会・報告] 加野まきみ (京都産業大学)

「*The English Dialect Dictionary* の原資料としての民俗学的情報の検討：特にマザーグースに注目して」

谷 明信 (兵庫教育大学)

本研究では *English Dialect Dictionary (EDD)* の原資料としての民俗学的情報の性質と範囲が検討された。民俗学的情報は “the traditional art, literature, knowledge, and practice that is disseminated largely through oral communication and behavioral example” を含む広範なものであるため、その総体を検討することは非常に困難である。そのため本研究では、民俗学的情報としてマザーグース (= nursery rhymes (NR)) に焦点を当て、Innsbruck 大学 Markus 教授作成の SPEED プロジェクトによる電子化された EDD (PDF 版) と現在の EDD online を用いて、nursery, rhyme, child(ren), Halliwell などの語や NR に特徴的な語を検索語として、さらに調査中に見つけた特定の語から、NR が調査・検討された。NR を調査した理由の一つは、EDD の編者 Wright (1898, vol. 1: vi) が EDD の序で、“popular

games, customs, and superstitions”の情報を丹念に収録している旨を明言しているからとのことであった。

発表では、まず SPEED 版 *EDD* と *EDD Online* について簡単に利点と問題点が指摘され、調査結果が報告された。まず、民俗学的な情報に関連する語、例えば、funeral, nursery, rhyme, Halliwell, superstition, game, song などの語を全文検索すると、そのうち game の頻度が高いことが確認された。そのあと、*EDD* における NR に関連する用例の記載の仕方が検討された。結論として、*EDD* における NR の引用は主に 2 種類に分類された。一つは語の説明のため、もう一方は NR を説明するというより、その NR が使われる game の説明のためであった。後者の場合、*EDD* の説明の仕方は独特で、説明は定義部ではなく用例を参照させて、用例部では先行研究である二次資料を引用することで game の説明を提供している。これらの点は *OED2* と大きく異なり、*OED2* は NR を語の歴史的変遷の説明のために利用し、一次資料から引用する。NR を引用する理由は game の説明であったが、その理由は民俗学的情報への興味のみならず、Wright の子どもへの関心を反映しているのではないかとの推測が述べられた。

質疑応答では、Wright が史的言語研究の貢献のために *EDD* を編纂したと思われるのに、民俗学的情報が詳しいことに関する質問、*EDD Online* のテキストの信頼度に関する質問、ドイツ語辞典を編纂した Grimm も言語のみならず民俗学への関心を持っていたことに関するコメントがあった。

「英和辞典の記述とコーパスの活用」

田畑圭介（神戸親和女子大学）

本発表では、一つの大型コーパスだけでなく、数種のコーパスを併用することで、英和辞典の記述に有益な情報を幅広く得られるということが例証された。まず、TVsubtitles.net のテレビドラマのセリフをコーパス化して検証することで、What do you got? や check in on といった、英英・英和辞典に記載のない表現が抽出できるようになることが述べられた。また英英辞典で Especially British English, 英和辞典で((主に英))のレーベルがついている語を用いて COCA で調査することで、((主に英))だけではない情報（例えば、autumn は((主に英))だが、leaves, sun, air, sky などの前では((米))でも autumn を好む傾向がある）が得られることが例示された。corpus.byu.edu の COHA と Time Magazine Corpus を用いると have a hard time ~ing の歴史的変化の情報が得られることも示され、例えば、現在ではいずれの時制でも time -ing とし、time

to ... としない;20 世紀前半までは have a hard time to do の使用がいくらか見られたが、現在ではきわめてまれといった通時的な文法記述が可能となることが指摘され、中型英和辞典と大型英和辞典における語法の史的变化の扱い方についても論じられた。発表の終わりには、インターネットの画像検索を用いることで動植物や will call といった表現がどの程度日常的なものであるかが検索結果から推察できることが示された。こうした情報は Walter(2010)の述べる識別指標によって整理されることもあわせて論じられた。

質疑応答では、テレビドラマコーパスから得られた事実を幅広いレジスターの観点で論じる必要性、及び、have a hard time ~ing が COCA では現在時制が最多となった結果の再検証の必要性についての指摘があった。類似表現である have a devil [heck, hell] of a time ~ing では COCA で過去時制が最多となることから、この種の表現は過去時制を優勢とする帰結が妥当のようであると述べられた。

■ 講演

「New directions in corpus linguistics: Utilizing the rich annotations found in social media data」

Laurence Anthony（早稲田大学）

Laurence Anthony 先生には、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）における言語分析が、今後の言語研究にどのような可能性をもたらすのか、そしてそれを分析するためにご自身が開発された、最新のツールに関して講演いただいた。

まず前置きとして、コーパスの歴史と今、それに伴って発展したアノテーションの歴史やコーパスデータを扱うソフトウェアを概観された。世界初の電子コーパスである Brown Corpus においてタグは行番号のみ（改訂版で POS タグが付与された）であったが、BNC では大規模なデータに対し、POS タグ、テキストジャンル、発話及び書き手の性別や年齢といった詳細な情報まで付与されるようになった。また、近年ではインターネット上の情報をコーパスとして利用する試みも出てきており、Sketch Engine や GloWbE といった収録語数が 10 億語を越す超大規模電子コーパスの公開、さらに最新の動向として、SNS、特に Twitter をコーパスとして利用する研究も出てきていることを紹介された（Grieve 他（2014））。

Grieve らの研究では Twitter を研究対象として使用することで、リアルタイムの言語使用を明らかにできることが示唆された。しかし、Anthony 先

生は、Twitter データの使用に関して、(i) 収集するのに極めて煩雑な手続きを要すること、(ii) Twitter データは BNC などとは比にならないほど複雑なアノテーションが施されており、研究に取り掛かる前の処理に膨大な労力がかかることを指摘された。

以上の課題を克服するために Anthony 先生は FireAnt (Filter, Identify, Report, and Export Analysis Tool) を開発し、本講演で紹介された。FireAnt は、Twitter アカウントを持っていれば、いつ、どこで発せられた言葉 (つぶやき) なのかなど、必要なデータを数回のクリックで取得することが可能になっており、以上で挙げた 2 つの問題点を見事に克服している。

本講演では FireAnt を通して行われた 2 つの事例研究が紹介された。まず 1 つ目に、米国大統領選挙の公開討論会に関する Twitter の動向を探るといものである。ここで Anthony 先生が提示した研究課題は、(i) Twitter のつぶやきの回数から各候補者に対し、どのような意見が見られるのか、(ii) Twitter 上で候補者の態度がどのように反映され、Twitter 上でどのようにしてユーザー間がコミュニケーションを取っているのかという 2 つであった。まず、(i) の分析においてはクリントン氏とトランプ氏いずれも約 3200 個のデータを扱い、Liu 他 (2005) が提示した positive words と negative words を分析した。すると、positive words の使用の多くは、候補者自身を肯定する使用が多いのは確からしいが、そうでない時は対立候補者に対するネガティブキャンペーンであることが確認された。Negative words の使用は、ネガティブキャンペーンに多く見られるが、クリントン氏に関しては *let's recommit to ending violence and hate against LGBT people worldwide* とつぶやきを残しており、自身の政策に性的少数派へのコメントとして使用されていることが確認された。

次に、(ii) に関しては、各氏の Twitter アカウントに直接つぶやく行為 (mention と呼ばれ、日本語では「独り言」という) をしているデータを各氏 1000 例ずつ収集し、ネットワークとしてプロットした。すると、クリントン氏に直接独り言を述べているアカウント数はトランプ氏への独り言に比べて多いものの、何度も独り言をアップロードしているアカウントは、トランプ氏の方が多いことが明らかになった。また、Liu 他 (2005) の positive/negative words を独り言のアカウントに応用すると、各氏に対して肯定的な意見を持つ独り言と否定的な意見を持つ独り言が明示的にプロットされる。この分析から、肯定的な独り言をつぶやく回数が多い人が両氏に多いが、クリントン氏の場合、その差は歴然である一方でトランプ氏の

場合は微妙な差しか確認されないということが明らかになった。

次に提示された内容は、English for Specific Purposes という雑誌に掲載された論文のタイトルを FireAnt で分析をした結果である。すると、writ* と academic に、また business と writing に言及した論文が圧倒的に多いことが明らかになった。また、read* と writ* に言及したものも比較的多いことも明らかになった (*はワイルドカード)。

拙稿の最後に、本講演会を聞いた印象を述べると、FireAnt は様々な分野に対して可能性を持ったツールであると感じた。例えば、リアルタイムの言語使用を調査できるため、社会言語学や理論言語学、さらには政治学や世論調査といった学際的な研究には、FireAnt が不可欠なものになることを確信している。しかし、一朝一夕で使いこなせるものでもないため、ハンズオンの勉強会などがあれば、積極的に参加したいと思った次第である。

木山直毅 (和歌山大学非常勤)

■ シンポジウム

「コーパスアノテーション (タグ付け) の功績と課題」

司会 後藤一章 (摂南大学)

コーパス言語学研究において、任意の言語項目の検索処理はすべての起点となる。近年では、単純な文字列のパターン検索に留まらず、統語情報や修辞情報、さらには誤用情報や語用論情報などの領域にまで、検索ニーズは多様化している。こうした抽象度の高い情報を効率的に発見するためには、手動であれ自動であれ、アノテーションの利用が有効である。本シンポジウムは、各分野においてそれぞれアノテーションを活用してきた講師たちが、その現状や活用事例を広く紹介することを目的として企画されたものである。

「学習者コーパスのアノテーション: 「誤り」とその向こう側」

和泉絵美 (同志社大学)

前半では、学習者コーパスへのエラー・アノテーションについて概観した。エラー・アノテーションは、学習者言語に見られる現象を母語話者との比較に基づいて逸脱として扱うというスタイルから、ありのままの学習者言語の姿を捉え損ねる原因となる (comparative fallacy) という論点で批判されることも多い。そこで、comparative fallacy を回避する方策として、目標仮説 (target hypothesis) に基づく重層的なアノテーション (multi-layered annotation) を紹介した。また、なる

べく学習者言語の全容を捉えるために、正の要素 (positive features) にも着目する必要があることにも触れた。特に、近年 CEFR に代表される Can-do ベースの言語教育が隆盛を見せ始めていることに伴い、発話行為・言語機能・言語項目といった異なる次元の情報を組み合わせて必要な情報を抽出できるようなアノテーションを提案した。

「タグ無しコーパスとタグ付きコーパスからのコロケーション抽出」

後藤一章 (摂南大学)

タグ無しコーパス、品詞タグ付きコーパス、統語タグ付きコーパスの 3 種類を用いてコロケーション分析を行い、その結果にどのような差異が現れるかを報告した。タグ無しコーパスと品詞タグ付きコーパスについては共起スパンモデルと呼ばれる手法で分析を行い、統語タグ付きコーパスでは統語準拠モデルと呼ばれる手法で分析を行った。まず、タグ無しテキストの場合は、様々な品詞の共起語が混在し、分析の視点が散漫になりやすいという欠点が見られた。また、同じ品詞の単語群との相対化によって浮き彫りとなるような、特徴的な共起語の発見にも不向きであることが確認された。一方、品詞タグ付きコーパスの分析結果では、特定の品詞の単語のみが抽出されるため、キーワードの用法を特定の統語構造に特化して体系的に分析できる利点が認められた。ただし、キーワードとの直接的な統語関係の有無を知るには KWIC の確認が必要であった。最後に、統語タグ付きコーパスのコロケーション分析結果には、キーワードと直接的な統語関係 (例えば「述語+目的語」など) を有する単語のみが含まれていることが分かった。KWIC の確認が必要ないため、品詞タグ付きコーパスを利用するよりさらに効率的で高精度な分析が可能であるが、統語タグの付与には大幅なコストがかかるという問題があった。結論として、タグ無しコーパスの使用は原則的に望ましくなく、品詞タグ付きコーパスと統語タグ付きコーパスの選択については、作業コスト及び、必要とされる精度のバランスによって決定すべきであることを主張した。

「語用論研究におけるアノテーション利用の現状」
椎名美智 (法政大学)

本発表では、発表者自身が作成した *Vocative-Focused Sociopragmatic Corpus* を中心に、歴史言語学・社会言語学・語用論に関する情報が付与された社会語用論アノテーションの説明、歴史語用論の事例研究の結果、詳細なアノテーションのメ

リットとデメリットについての報告、今後の課題と提案がなされた。

事例研究では、二人称代名詞が you に収斂していく初期近代英語期における you/thou と呼びかけ語の共起状況の調査結果、thou が使用される場合の対話者の関係や属性、thou の語用論的意味、共起する呼びかけ語の語用論的機能について論じられた。Thou は上下関係、親近感を示すとされているが、本コーパスにおいては、絶対数は少ないながらも、thou を使用する対話者は男同士、友人同士、同じ社会的ステータス、同年齢の場合が多く、上限関係よりも親近感を示す場合に使われていることがわかった。

呼びかけ語が使用される発話では、you, thou, you/thou (混合使用) のいずれの場合でも、非近距離呼称と近距離呼称との差が 1% 水準で優位、つまり you は非近距離呼称において有意に多く、thou, you/thou 混合使用の場合は近距離呼称において有意に多いことがわかった。Thou と共起しやすいのは、Surname only, First name, Familiar, Kinship terms, Endearment など、ポジティブ・ポライトネスへの志向の高い呼びかけ語であることがわかった。とはいえ、thou の使用が減少する通時的変化の中で、you がこれまで thou との親和性の高かった近距離呼称と共起するようになってきていることも報告された。具体例では、同じ対話者間で二人称代名詞が thou から you へとシフトし、対話者の距離感を調整している例も紹介された。

質疑応答では他の調査結果の紹介が求められ、男女の対話者の親しさと呼びかけ語の関係について、親しさとポジティブ・ポライトネス志向性の高い呼びかけ語使用の相関が階級によって異なることが報告された。書かれたテキストにおいて発話を示す句読点の問題など、歴史的テキスト特有の問題に関するコメントなど、多くの関心が寄せられる発表となった。

「修辞項目のアノテーションを活用したテキスト分析」

田畑 智司 (大阪大学)

テキストの計量研究の多くは語彙の生起頻度 (word counts) をベクトルとして用いる 'bag-of-words' モデル (Juola, 2006) に依拠している。Word counts は、語の形式についての定義さえ明確であれば、低いコストで計測でき、かつ再現性を担保できるからである。一方、テキストの意味的な特徴や修辞的特徴は、形式に基づく一義的な定義が困難であるため、それらを量的に分析記述するには大きなチャレンジが伴う。当発表では、Kaufer et al. (2004) が提示するレトリックモデルに基づい

て、テキストの修辭的特徴のアノテーションについて概要を論じた後、修辭的アノテーションを活用したテキスト分析の一例を示した。機械学習による分類器 Random Forests の出力である判別指標と、Mann-Whitney の U 検定を相補的に利用し、英国ビクトリア朝の作家 Charles Dickens と他の作家の作品を識別する修辭的指標を抽出した。Dickens を特徴づける修辭的特徴は、Motion, Sense properties, Sense objects, Dialogue cues, Spatial relation, Resemblance などであり、動作や事物の描写、ダイアログの提示スタイル、空間描写、比喩・比較に関する項目が overuse されていることを明らかにした。他方、Dickens の作品で underuse になっているのは、Future Orientation, Insistence (Directives), Contingent Reasoning, Oppositional Reasoning, Metadiscourse, Negative Values, Responsibilities などであることを示した。

■ ワークショップ

「British National Corpus の利用に関わる諸問題」
西村祐一（元名古屋大学大学院生）

表題のワークショップが西村祐一氏を講師にお迎えして大会 1 日目午前中に行われた。研究者が BNC を利用する際の注意点について解説したもので、BNC を利用する際の有益情報を技術的な予備知識がなくとも理解できるようわかりやすく説明したものであった。具体的には 4 つの問題点：

1) セグメント(s-unit)に付与されている番号について、2) セグメントおよび語(w-unit)に付与されたタグの一部不備について、3) 空白文字列のみからなる語を含む w-unit の存在、4) hw (headword)が空白である w-unit の存在について論点を絞ってのものであった。また、「w-unit 内の品詞タグの正確性には注意が必要であること」を具体例で提示した。

これは、西村氏が BNC (XML Edition)をもとにして検索ソフトを自作した経験から、BNC の Reference Guide (www.natcorp.ox.ac.uk/docs/URG/)の記述と実際の BNC のデータ間の齟齬を散見したことによるもので、検索ソフトを作成する際の注意点についての情報提供でもある。

注目点を一つ挙げると、multiword について BNC_World と BNC_XML ではその扱いが大きく異なることにある。すなわち、前者では、<w>タグにまとめられているが、後者では個々の単語が <mw>タグと </mw>に挟まれた形式となっている。それゆえ、自ずと語数に違いが生じ、前者では生起頻度の正確さを歪めることとなる。語数が解析のパラメーターになる場合には、たとえば in

spite of を 3 語とカウントする BNC_XML の方がより適しているといえよう。

さて、西村氏のご自身の研究経歴も少し紹介されており、それもまた興味深いものであった。まず、コーパスとの出会いは、かつて中村純作先生の特別講義を受けたことによるもの、それ以降 BROWN コーパスの解析を手がけることとなり、さらに名古屋大学国際開発研究科でのコーパスに関する公開講座を受け、それがきっかけで同研究科の大学院進み、本格的なコーパス研究に打ち込むことになった、とのこと。

なお、配布された資料は上述の問題点について詳細に記述されたものであり、今後、BNC を扱う研究者にとっては必須の要注意マニュアルであると言ってよいであろう。

高橋薫（東京理科大学）

■ 2017 年度春季シンポジウムについて

昨年度と同様に、2017 年 4 月に春季シンポジウムを開催する予定です。詳細については決まり次第、メーリングリストとホームページにてお知らせいたします。

■ 第 43 回大会発表者募集

英語コーパス学会第 43 回大会は、2017 年 9 月 30 日（土）と 10 月 1 日（日）に関西学院大学で開催されます。例年通り研究発表を募集いたしますので、発表を希望される方は、下記の要領に従い奮ってご応募下さい。

【分野】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】本学会会員であること。

【条件】未発表の研究に限る。

【発表方法】研究発表（発表 20 分、質疑 10 分）

【応募方法】発表申込ウェブフォーム (<https://goo.gl/forms/Ktrk8cWThmsfGa252>) に必要事項を記入の上、事務局長 (jaecs.hq@gmail.com) 宛に Microsoft Word 形式の発表概要を電子メール添付ファイルとしてお送りください。発表概要は冒頭に題名のみを記し、800~1,200 字にまとめてください。ツール・コーパス開発などの発表を除き、リサーチクエスションならびに研究から得られた知見を明快に記述してください。必要に応じて参考文献を明示してください。ただし、文献リストは文字数には含めません。発表概要は応募者が容易に特定されることのないようご留意の上作成してください。応募者推定につながる文献は挙げないでください。本文には代表者名と発表題目を明記して下さい。メール本文には代表者名と発表題目を明記して下さい。

※応募情報は審査終了まで事務局のみが扱い、審査は発表概要のみに基づいて行われます。
※発表概要から容易に応募者が特定されると考えられる場合には、応募書類を加工して審査に付する可能性があることをご了承ください。

【応募締め切り】2017年6月30日(金)必着
【採否決定】2017年8月初旬(予定)

また、第43回大会では、賛助会員向けの発表枠を試行的に設置します。詳細は今後ホームページに掲載し、賛助会員宛にお知らせする予定です。

■ 新入会員紹介(11月25日現在; Sは学生会員)

望月圭子 (東京外国語大学)

Laurence Newbery-Payton (東京外国語大学 S)

杉山真央 (大阪大学 S)

夷石寿賀子 (国際交流基金日本語国際センター)

北原賢一 (麗澤大学外国語学部)

崎村耕二 (日本医科大学)

楓 育美 (会社員)

■ 理事会の決定事項について

9月30日(金)18時より成城大学において理事会が開催されました。承認された人事についてご報告いたします。

・大会企画委員(新任)

田中省作先生(立命館大学)

長加奈子先生(福岡大学)

藤原康弘先生(名城大学)

■ 『英語コーパス研究』編集委員会報告：投稿規定の改定について

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
中尾佳行

2016年9月30日(金)の理事会において、『英語コーパス研究』の投稿規定、スタイルシート、電子化、そして著作権について、編集委員会での検討結果を報告し、大筋において認められました。理事会での議論を経て、次のことが了承されましたので、ご報告します。

A. 『英語コーパス研究』投稿規定の改定(スタイルシートの作成を含む)(2017年度学会誌、第25号から適用予定)

1. 投稿規定の改定

現行規定を基本的に踏襲するが、次の3点を改定する。

i. 電子化：「出版と同時に J-STAGE からダウンロード可能とする」

※研究の国際的動向に対応するため。

※執筆者は、個人の権利として、自著論文を出版と同時に自分のホームページに掲載したり、教材としても使用できる等、利便性があるため。

ii. 著作権：「著作権は学会の所有とする」

※本誌はこれまで著作権について明記されていなかったことへの対応。

※執筆者の論文転載等の諸手続きについて、学会として、執筆者の権利及び利便性に応えると共に、掲載論文の諸手続きが簡潔・円滑に対応できるようにするため。

iii. スタイル：日英語論文のスタイルシート

(Webで掲載予定)に即して、執筆する。

論文構成の書式は、大枠において現行規定を踏襲している。

参考文献については、『英語コーパス研究』の書式(日本語の場合)、APA または MLA(英語の場合)。

※執筆者が執筆しやすく、かつ編集者がチェックしやすいようにするため。「チェックシート」にチェックして提出。

2. スタイルシートについて

日英語論文のスタイルシートを作成し、Web上に掲載する(2017年6月末予定)。2017年度、学会誌第25号から適用する予定である。

B. 電子化について

出版と同時に J-STAGE からダウンロード可能とする。

※執筆者から掲載許可を得るなどの手続き上の問題については、電子化公開前提で投稿してもらうことを、投稿規定で規定することにより対処する。

C. 著作権について

著作権は学会の所有とする。奥付に ISSN 番号とともに明記する。

※B同様に、投稿規定に規定する。編集委員会においては、「著作権は個人に帰する」という意見もあったが、理事会の議論を経て、「学会の所有」に結論づけられた。

※本学会に掲載された論文については、執筆者の権利が最重視されるもので、学会はそれを支援する立場にある。執筆者が自身の論文を学位論文や

著書などに転載する場合、本学会はこれに異議申し立て、あるいは妨げることはしない。論文は本学会誌に出版後、Web サイト（執筆者所属組織のサイトを含む）に掲載したり、教材として使用したりすることができる。ただし、出典として本学会誌を明記しなければならない。

■ 会誌『英語コーパス研究』第 25 号論文投稿募集について

『英語コーパス研究』第 25 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「総説論文」、「書評論文」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフトウェア紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【原稿提出締め切り】2017 年 11 月 30 日（木）

電子メール添付にて提出してください。提出方法等についての詳細は学会 Web ページの投稿規定 http://jaecs.com/jnl/jnl_kitei.pdf を参照してください。この度投稿規定を一部改定しましたのでご注意ください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

『英語コーパス研究』編集委員会
e-mail: jaecs.ed@gmail.com

【採用通知】2018 年 1 月

【刊行予定】2018 年 5 月下旬

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
中尾佳行

■ 英語コーパス学会 学会賞・奨励賞の募集案内

2017 年度英語コーパス学会賞および奨励賞を募集いたします。学会賞は、英語のコーパス利用を中心に据えた英語研究・教育、あるいはその関連領域の研究や学会活動などに、多大な貢献が認められる業績に対して贈られる賞です。今までに、著書、一連の複数論文、コーパス分析ツールの開発などの業績に対して授与されています。同時に、特に若手研究者を対象に、奨励賞も募集します。こちらは、若手研究者の優れた業績に報いるために設けられた賞です。どちらの賞のメ切も、2017 年 6 月末日です。奮ってご応募ください。

【対象】学会賞は、英語コーパス学会の目的に照らし、英語コーパスに関わる特に優れた研究業績（著書、一連の複数論文、コーパス分析ツールの開発、その他）をあげた学会員（個人またはグループ）とする。奨励賞は、39 歳以下で、英語コーパスに関わる優れた研究業績（著書、学会誌『英語コーパス研究』に掲載された論文 1 編以上、コーパス分析ツールの開発、その他）をあげた学会員個人を対象とする。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 推薦理由書（所定の書式 [Word, PDF] による）。以下のリンクからダウンロード可能。 Word: http://jaecs.com/doc/nomination_form-j.doc PDF: http://jaecs.com/doc/nomination_form-j.pdf 2) 単行本の場合：事務局で用意するので送付は不要。論文の場合：現物またはコピーを送付。

※ネットから自由にダウンロードできるものは、ダウンロード先の明示のみでよい。

※奨励賞対象が論文の場合は、『英語コーパス研究』に限定されるので送付は不要。

【提出先】〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20 成城大学 社会イノベーション学部 石井康毅研究室 気付 英語コーパス学会事務局 E-mail: jaecs.hq@gmail.com

【応募期限】2017 年 6 月 30 日（金）

【審査結果の報告および表彰式】2017 年度年次大会（関西学院大学 9 月 30 日）

学会賞選考委員会委員長 新井洋一

■ JAECS 東支部来春の研究会のお知らせ

東支部の活動についてお知らせします。

昨年度（2016 年 3 月実施）から、他分野でのコーパス利用についてのノウハウの紹介や、情報交換などが行える機会として研究会を計画し、初回の「社会言語学」に引き続き、今回は「歴史言語学」をテーマとして設定いたしました。開催予定の日時、場所、研究会の演題は以下の通りです。

<JAECS 東支部来春研究会>

・日時：2017 年 3 月 11 日（土） 14:00～17:00
（終了時刻は予定）

・場所：東京成徳大学 東京キャンパス（東京都北区十条）

・司会・講師 塚本 聡（日本大学）

・講師 西村 秀夫（三重大学）

神谷 昌明 (豊田高専)

◇テーマ：コーパスの言語学諸分野における活用
(2) 歴史言語学

◇発表概要 (予定)

- ・「史的英語コーパスの 25 年」西村 秀夫
- ・「句動詞の起源・発達---古英語に現れる接頭辞付動詞の抽出; YCOE を利用して---」神谷 昌明
- ・「ME における句動詞の変遷---PPCME2 を利用して」塚本 聡

詳細につきましては、追ってお知らせいたします。年度末の時期ではありますが、多くの会員の方の参加をお待ちしています。

東支部長 大和田栄

■ 総会での提案事項について

10 月 1 日 (土) に開催された総会において SIG の設立に関する提案がありました。重要な提案ですので改めて明記してお知らせいたします。

<SIG の設立について>

学会の研究活動の活性化を目的として、理事会では現在の東支部などの地域をベースにした支部形態を発展解消し、コーパス言語学の各専門領域に特化した Special Interest Group (SIG) を作り、会員相互の研究交流を図る、という方向性で大筋合意を得ました。これにしたがい、会長・事務局を中心にして、SIG 設立の準備を進めていきます。2017 年 3 月を目標に、会員に向けて SIG の設立申請を行えるよう規約等の整備及び広報活動を行う予定です。

■ 今後の大会日程と開催校

第 43 回大会は 2017 年 9 月 30 日・10 月 1 日に関西学院大学にて開催する予定です。

第 44 回大会は 2018 年 9 月下旬から 10 月上旬に東京理科大学にて開催する方向で現在調整を行っています。

■ 事務局から

事務局からは情報発信のツールとして、ホームページ、ニューズレター、JAECs メーリングリスト、Twitter (@JAECs2012) でイベントの案内などを随時行っております。

◇メーリングリストの移行について

英語コーパス学会のメーリングリストは長年の

間、園田勝英先生 (北海道大学) に管理をお願いしておりましたが、2016 年度中に事務局が管理する新しいメーリングリストへ移行する予定です。詳細は追ってお知らせいたします。

園田先生、長年にわたりご尽力下さり誠にありがとうございました。

◇会費納入のお願い

2016 年度会費 (一般 6,000 円, 学生 3,000 円) 未納の方は、6 月または 9 月にお送りした払込取扱票を使ってお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします [振替口座: 00930-3-195373; 加入者名: 英語コーパス学会]。払込取扱票を紛失された方は、郵便局に備え付けのものにお名前・ご所属等の必要事項をご記入の上お納めください。

過年度会費未納の方は、2016 年度分と併せてお納めください。過年度会費未納の場合、機関誌などの送付を一時中止させていただいております。

住所、所属などに変更や異動のある方は、学会ウェブサイトの「会員情報変更」からのお手続きをお願い申し上げます。

※会員の皆様には、日頃より会費の当該年度内納入にご協力をいただきまして、お礼申し上げます。会費を滞納されますと、退会時に滞納分をまとめてお支払いいただくといった事態にもなりかねません。会員の皆様におかれましては、円滑な学会運営のためにご協力いただけましたら幸いです。なお、退会を希望される場合は、当該年度内に学会ウェブサイトの「退会手続」からのお手続きをお願い申し上げます。

FORUM

■ TaLC 2016 (12th Teaching and Language Corpora Conference)に参加して

佐竹由帆 (駿河台大学)

TaLCは言語コーパスの教育利用についての学会である。コーパスやコーパス分析ツールが言語教育にどのように役立つかについて研究発表が行われており、1994年に第一回大会が開かれて以来隔年で大会が開催されている。教室におけるコーパス利用、DDL (Data-driven learning) やコーパスを利用した教材作成の促進などをめざす。

今年度の年次大会TaLC2016は7月20日から23日の日程で、ドイツのユストゥス・リービヒ大学ギーゼンで開催され、下記の5つのPlenary speechesが行われた。Tony McEnery: “A New Look at Learner Language - the Trinity Lancaster Corpus,” Gaëtanelle Gilquin: “One norm to rule them all? Describing and evaluating learners’ usages in learner corpus research,” Marcus Callies: Towards corpus literacy in language teacher education,” Barbara Lewandowska-Tomaszczyk: Collaborative native – non-native student translation tasks in CMC: A corpus-based study,” Anke Lüdeling: Morphological Productivity in Spoken and Written Learner German.” 筆者はDDLに関心があるため、特にCallies先生の話に興味深く聞いた。DDLを推進しようにもコーパスについて何も知らない教師が過半数である現状は日本も同様であるため、Callies先生のように教師のためのワークショップを開くなどの活動を行うと、DDLの推進に役立つかもしれないと考えた。また、講演後の質疑応答で出た二つの懸念についても考えさせられた ((1) どのようにコーパスを使用する・させるかについての研究が、学校で実際に使用するためにはもっと必要ではないか (2) コーパス使用にまつわる不確かさ—使用していいのか)。(2)は(1)の懸念、DDL研究がまだ十分ではないことから生

じているので、DDLの研究者としてさらに研究を進めていかなければ、という気持ちになった。

初日に四つのテーマで15のワークショップがあり、第二—四日に十のテーマで49の研究発表があった。ワークショップのテーマは下記の通りであり (“Learner language, corpus linguistics and mobile learning,” “In search of specialized terminology and phraseology with the help of corpora,” Tense and aspect in learner language,” Introduction to statistics for linguistics with R”), 研究発表のテーマは下記の通りである (“Learner corpus research 1,” “DDL,” “ESP Settings,” “Error Analysis and L2 Learning,” “Corpus Tools & Corpus as Tool,” “Corpora Development and Projects 1,” “Teaching and Teacher Training,” “Tools & Methodology,” “Academic writing,” “Text Type and Genre”)。

英語コーパス学会会員の発表は四つあり、“Error Analysis and L2 Learning”のテーマで“Grammatical Errors across Proficiency Levels in L2 Spoken and Written English” (Mariko Abe)と“The effects of corpus and dictionary use: Error correction in L2 writing” (Yoshiho Satake), “Corpora Development and Projects”のテーマで“Modifying Corpora Authenticity to Benefit Beginner Level EFL Students: An Update on SCoRE” (Kiyomi Chujo, Kathryn Oghigian, Shiro Akasegawa), “Text Type and Genre”のテーマで“Evaluating the Effectiveness of Prototypical Text Detection in Teaching and Research: New Developments and Applications of ProtAnt” (Laurence Anthony, Paul Baker)の発表が行われた。

写真は研究発表会場の一つ“Senatssaal”の壁面である。歴代の教授の油絵が多数かかっている歴史を感じさせる部屋である。筆者はこの会場で発表を行ったが、現実の聴衆に加えて油絵の教授たちにも見られているような、不思議な感覚があった。

次の大会は2018年に開催される。日時および会場校は未定である。

※ TaLC 12については URL: <http://www.uni-giessen.de/faculties/f05/engl/ling/talc>を参照。



2016年12月26日発行

編集・発行 英語コーパス学会
会長 投野 由紀夫
事務局 〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20
成城大学社会イノベーション学部
石井康毅研究室気付
e-mail: jaecs.hq@gmail.com
twitter: @JAECs2012
URL: <http://jaecs.com/>
